

新 刊

□Behnke H.-D. and Mabry T. J. ed.: *Caryophyllales. Evolution and systematics*. 334 pp. 1994. Springer-Verlag, Berlin. 約¥23,000.

1992年 Heidelberg Univ. で行われたナデシコ目 Caryophyllales に関するシンポジウムの報告を論文として纏めたものである。花の構造、花粉、維管束配列とその構造、染色体、Chloroplast の DNA, Batalin 含有の進化的意義等色々の方面からの研究が載せられている。纏まった見解を目的にしているものでないから、結論は人に依って様々である。子房の形態からは Cactaceae の Pereskioideae が primitive としている論文もあるが、一方染色体からは Cactaceae は進んだ群とされている。また Dillenoideae 特に *Paonia* に関係があるとする人と、それには関係がないとする人とあるのは面白い。雄しべが centrifugal のものが多いことだけで Dillenoideae に関係づけるのは行き過ぎであろう。Calyophyllaceae を除いて花被が一輪であることや、胚形成が全く異なるなど Dillenoideae とはかなり異なる。Calyophyllales が他のどの群に類縁関係があるかを述べるには研究が不十分だけれども、ナデシコ目自体はよく纏まっていることが示されているのは従来と異ならない結果である。ただ幾つかの論文でタデ科との間には距離があるとされるのには注目される。ナデシコ目の類縁を考慮するには Cactaceae, Aizoaceae, Phytolaccaceae が重要で、他の科はそれからの派生であるとする見解は注目してよいと思う。私はこれにタデ科も加えるべきであると思う。走査電顕によるナデシコ科の花の構造は面白い。花弁は内側の雄しべと共通の原基から作られ、後で雄しべの外側に分離する。花弁は外側の雄しべより内側に位置していると言えるかどうか微妙だけれど、外側の雄しべより後で、内側の雄しべと同時に発達する。この本では触れていないけれど、Calyophyllales の中でナデシコ科にしか見られない花弁のこのような特殊な発生は、私が前に述べたように(植物分類・地理 38: 28-30, 1987) 雄しべ起源に依るからだろうと考えられる。(山崎 敬)

□渡辺定元：樹木社会学 450pp. 1944. 東京大学出版会。¥5,200.

野外で身近に接する植物群落を理解し発展させるには、どのように捉えたらよいかを、種の生活の解析を基本にして詳細に纏めたものである。植物社会学は群落の把握に群集という概念を導入し、それを基礎として解析を進めてきた。それは多様な現象を抽象化することで、より高次な内容に発展させたように見えるけれど、具体的な事実から離れることで発展は停滞ぎみである。本書では抽象化することで置き去られていた種を基礎とし、その生活を通して群落内の個々の種の共存関係を解析することで、群落を理解し、将来への発展を図ろうとしている。群落内における個々の種のニッチの解析を重視する。それに依って種の相互関係、さらには種進化の把握にも迫り得ることを具体的な例を基に述べている。今西理論の基礎となっている「棲み分け」の原理も、ニッチの解析で初めて有効な原理として作用するといった、きわめて意欲的な内容である。従来このような内容の本は存在しなかった。野外の植物を研究相手とするものには一読する必要があると思う。(山崎 敬)

68巻正誤 Errata in Vol. 68

号 (No.)	ページ (page)	行 (line)	誤 (For)	正 (Read)
6	318 (Table 1)	↑ 7	エンコウカエデ	→ ケエンコウカエデ
		↑ 2	アサイタヤ	→ アカイタヤ
	324	↓ 21	解説したし、	→ 解説した、
	356 (Table 1)	↑ 5	<i>A. keissler</i>	→ <i>A. keissleri</i>